

要 旨

Relationships among self-efficacy, motivation and L2 proficiency
in first- and fourth-year English majors

9E13002

嶋田 あや

本修士論文では、英語を専攻する日本人大学生の自己効力感・動機付け・第二言語能力との関連性を明らかにした。この論文における研究課題は以下の2点である。①英語を専攻する日本人大学生の自己効力感・動機付け・第二言語能力にはどのような関係があるのか。②英語を専攻する日本人大学生の自己効力感・動機付け・第二言語能力には、1回生と4回生で差があるのか。

研究は質問紙調査法と個別面接調査法を用いた。対象は178名の英語を専攻する日本人大学生であった。調査はまず質問紙の因子分析で信頼性・妥当性を確認し、因子間相関分析を行なった。次に因子得点を算出し学年間の因子の差を比較した。その後個別面接調査を1・4回生4名ずつ、合計8名に実施した。

本研究の結果から、以下の4点が明らかになった。①英語を専攻する日本人大学生の英語四技能における自己効力感は、特に内発的動機付けと関連性があった。これは本学科の学生が、「自分の英語の能力を高める」といった内発的な動機付けに根ざした英語学習の目標を持っているからである。また、②本学科の学生の特徴として、特に産出的な能力に対する自己効力感と第二言語能力に関連性を持っていることが明らかになった。続いて因子の学年差の比較では、③1回生のほうが道具的動機付け・理想自己の平均値が高かった。この理由は2点ある。(ア)1回生は授業をクラス単位で受講するため、競争的な環境が生まれやすい傾向にある。(イ)1回生は興味がある・ないに関わらず、沢山の必修科目を受講するため成績のために勉強する傾向にある。

理想自己に関しては、4回生は就職や卒業を控え将来の自分と英語との関係性が明白になっているが、1回生は卒業までに猶予があり将来の夢や英語能力への理想が定まっていないことが原因だと考えた。一方、④4回生のほうが書くことにおける自己効力感・第二言語能力の平均値は高いことが判明した。この理由として、4年間で培ったライティングの経験が4回生に「できる」という気持ちを持たせたと考えられる。また、第二言語能力の点数は4年間の学習の成果を表していると言える。

今後の研究では、英語を専攻する大学生の自己効力感と内発的な動機付けとの関連性、産出技能における自己効力感と第二言語能力との関連性・そして学年差による理想自己・道具的動機付け・書くことに関する自己効力感にさらに焦点を当て、その構造を明らかにする必要があると言える。

キーワード：自己効力感、動機付け、第二言語能力